

The background is a watercolor illustration. It depicts a field of tall, golden-yellow grass. A wire fence with blue metal posts runs diagonally across the middle ground. In the foreground on the left, a small brown and white bird is perched on a stalk of grass. In the lower right foreground, a brown and white speckled bird is standing. The sky is a mix of soft pink, orange, and light blue, suggesting a sunset or sunrise. Several birds are shown in flight: a small flock in the upper left and a few larger birds in the upper right.

2021 年度（第 35 回）

日本鳥類標識協会全国大会 オンライン大会

2021 年 12 月 25 日（土）

会場：オンライン

主催：日本鳥類標識協会

2021 年度（第 35 回）日本鳥類標識協会全国大会

日程表

12月25日（土）

9:30～ ZOOM会議室 開場

10:00～ 開会挨拶：日本鳥類標識協会会長 千葉 晃
実行委員挨拶：澤 祐介

10:10～ シンポジウム
「鳥類標識調査の動物福祉～バンダーが安全に調査を行うには～」

- ・ 趣旨説明
…細谷 淳（宮城県）・牛根奈々（日本獣医生命科学大学）
- ・ 野生鳥類の調査研究と動物倫理 -バンダーのバンディング調査の扱いや調査中の負傷鳥の関係を考える-
…森本 元（山階鳥類研究所）
- ・ こんな時どうするの？異常が疑われるときの応急処置 ～動物福祉の観点から～
…牛根奈々
- ・ 傷病鳥の対応について …佐藤達夫(NPO 行徳自然ほごくらぶ)
- ・ マンションでもできる！傷病鳥の飼育事例の紹介
…細谷 淳
- ・ 総合討論
司会進行：細谷 淳

12:00～13:00 休憩（ブレイクアウトルームでご歓談ください）

13:00～ 一般講演（1演題15分）

1. 繁殖鳥モニタリング調査で見えたもの（札幌・羊ヶ丘の9年間）
（川路則友）
2. カワセミの嘴（内田 博）
3. コルリの羽装と年齢に関する検討（木下 徹）
4. 京都府の鳥類標識情報の俯瞰作業とその展開（須川恒・辻本大地）

14:00～14:05 休憩（5分）

5. 浦安市千鳥にて繁殖したコアジサシ (佐藤達夫)
6. 日本産鳥類の識別ガイド作成構想について(深井宣男・ML id-guide)
7. 新潟県加茂川におけるアオシギの標識事例と採食習性(千葉 晃)
8. ハクセキレイのadventitious replacementと性、年齢階級、体調の関係の実験的検証(高木昌興)
9. ユリカモメ・カラーマーキング事情(澤 祐介)

15:25～15:40 休憩 (ブレイクアウトルームでご歓談ください)

15:40～17:30 **網場紹介発表** (20件、詳細は19ページからを参照)

17:30～18:30 休憩 (ブレイクアウトルームでご歓談ください)

18:30～20:00 懇親会

20:00 閉会挨拶 日本鳥類標識協会副会長 梶田 学

*本年度の総会は書面およびオンライン開催となりますので、大会中には行われません。

日本鳥類標識協会 オンライン大会シンポジウム

「鳥類標識調査の動物福祉～バンダーが安全に調査を行うには～」

開催趣旨

近年動物福祉の考え方はますます市民権を得ており、2021 年にフランスで可決された新しい動物福祉法では、ペットショップでの生体販売の制限や水族館等での動物を使ったショーの禁止など、踏み込んだ内容になったことも記憶に新しく、世界各国の世論がこの考え方の徹底へと大きく動いている状況にあります。

科学研究の場においても例外ではなく、国際的な学術誌の多くが投稿規定で動物実験の適切な扱いを義務付けています。鳥類標識調査も科学的な営みの一つであり、一般の方の理解を得るためにもこのような考え方は今後ますます重要になっていくと思われます。

動物福祉の国際的な共通認識と言える「5つの自由」は1. 飢えと渇きからの自由、2. 不快からの自由、3. 痛み、怪我、病気からの自由、4. 正常な行動を発現する自由、5. 恐怖と苦悩からの自由ですが、標識調査においても鳥を適切に扱うことで、これらの原則を十分に守ることが出来ます。

本シンポジウムでは動物福祉の考え方をもう一度振り返りながら、海外の標識調査での扱いや日本の現状を確認します。また「5つの自由」の「3. 痛み、怪我、病気からの自由」に注目し、調査中に稀に発生する傷病鳥の扱いや一時飼養の方法・実例を紹介します。最後に皆様と標識調査における動物福祉について議論をしたいと思います。

野生鳥類の調査研究と動物倫理 —バンダーのバンディング調査の扱いや調査中の負傷鳥の関係を考える— 森本 元（山階鳥類研究所）

この20年ほどの間に、動物を扱う研究における倫理問題への理解が世界中で急速に広がってきた。かつて動物実験では、対象動物の苦痛や負担について軽視されていたが、現在ではそうした考えは許されるものではなく、十分な倫理的検討が求められている。たとえば多くの学術雑誌において、動物倫理に配慮して行った研究であるかどうかを確認するチェック項目が、論文の投稿時に著者に対して設けられている。また、大学や研究所といった研究機関では、研究対象とする動物への倫理的配慮がなされているかどうかを審査する内部組織（倫理委員会や審査委員会など）を設置している。ほんの十数年前にはこうした組織はないことが普通だったが、現在ではあらゆる研究機関で設置が常識になっている。

その対象範囲は、何もケージ内で飼育され薬物投与や解剖されている実験動物に限った話ではない。野外で捕獲される野生動物もその対象となりうる。もともとは実験動物の負担をベースに始まったこうした倫理問題は、かつてはそれら飼育動物に限定的なものだったが、その後、野外における野生動物についても同様であろうとの考えのもと、対象が拡大されて現在にいたっている。これは職業研究者に限らずボランティアで活動しているバンダーによる調査についても同様の問題が生じており、現在では山階鳥類研究所内の審査組織において、バンダーが行う鳥類標識調査について、動物倫理審査と実施の承認を行っている。本発表ではこうした問題や承認の仕組みについて紹介する。

これに加えてバンディングにおいては、その調査中にやむをえず負傷鳥が発生することがある。こうした負傷鳥の発生原因として、ネコやイタチ類といった捕食者による被害や、網にかかった状態での強風による窒息などがありうる。こうした事故の発生頻度は低いものであるが、それらの原因を把握することや、こういった類いの事故が多いのかを理解することは、負傷鳥を減少させる事故対策を講じるために重要である。そして調査研究対象の動物が負傷するというこの問題は、前述した動物倫理の問題とも密接に関連している。

そこで本発表では、バンディングにおける事故の原因の種類と発生頻度の傾向を紹介するとともに、バンディング調査の動物倫理的な位置づけ、そして両者の関連性についての知見を提供し、この問題への議論を深めていきたい。

こんな時どうするの？異常が疑われるときの応急処置 ～動物福祉の観点から～
牛根奈々（日本獣医生命科学大学）

令和元年6月に動物の愛護及び管理に関する法律（以下、動愛法）が改訂された。新たに加えられた条文の中でも、動物虐待に関する内容は鳥類標識調査に密接に係る事項である。国外では、実験動物にとどまらず、野生動物の調査においても倫理や動物福祉を留意したうえで、調査を遂行する体制が図られている。

鳥類標識調査は長期間の継続調査によって野鳥の生態の解明や基礎データの収集に繋がる。そのため、今後の鳥類標識調査の継続にとっては、捕獲する野鳥の福祉の尊重と、関連する標識調査員の動物福祉に対する意識付けが重要であると考えられる。

本講演では、フィールド調査中に発生する野鳥の事故について、応急的な対応と判断を紹介すると共に、日本の標識調査マニュアルと国外の標識調査マニュアル及びガイドに記載されている動物福祉に関する事項を比較・解説し、今後の鳥類標識調査における動物福祉の在り方を提案する。

傷病鳥の対応について

佐藤達夫（NPO 行徳自然ほごくらぶ）

私は千葉県内にて標識調査の活動をしています。林縁や草原での霞網、カワウ・サギ類のヒナ、カモメ類、砂浜でのコアジサシやシロチドリの調査を実施していますが、残念ながら調査中に負傷したり弱ってしまった鳥がいました。私の職場は傷病鳥の施設があり、県内各地から傷病鳥の持ち込みがあります。その際の経験などを元に調査中に起きてしまった傷病鳥の扱いについてお話しさせていただきます。

傷病鳥となった際、安静、保温を第一にしましょう。収容する入れ物は、段ボールで十分です。床面は新聞紙か絡まりにくい布を敷き、保温用に携帯カイロなどを布で巻き、暑すぎた移動できるようにします。温度は 30～35℃が望ましいです。酷く弱っていなければ、スポーツドリンクを補液するとその後の回復を助けることが多いです。保護した際に体重を計測し、飼育中に減少しないよう目安にしています。オオジュリンやアオジなどの種子食の小鳥は餌付くことが多く、保護翌日～31 日後に放鳥できた。箱内を飛べるようでしたら、天気の良い午前中に放鳥しています。

マンションでもできる！傷病鳥の飼育事例の紹介

細谷 淳(宮城県)

近年動物福祉の考え方が多くの国や地域で受け入れられ、各国の鳥類標識調査のマニュアルでも動物福祉への配慮が最も重視される事柄であると強調されている(Lowe 1989; North American Banding Council 2001; 山階鳥類研究所保全研究室 2009; Fair et al. 2010; Busse & Meissner 2015)。しかしながら標識調査中の事故は経験豊富なバンダーがすべての良い慣行に従って行っても稀に発生することが知られている(Fair et al. 2010)。

標識マニュアルには「調査中に不慮の事故等により、鳥を傷つけてしまった時、バンダーはその鳥の状態を的確に判断し、その鳥が飛べないか、飛べても外敵に襲われる恐れのある場合などには、これを安全に収容し正常に飛べるようになるまで保護するなど、バンダーとしての責任を果たさなければならない。」とある(山階鳥類研究所保全研究室 2009)。

米国やカナダでは標識調査によって捕獲した鳥は 24 時間以内に放鳥しなければならず、英国では保護が許可されていない。そのため専門の許可を持った獣医やリハビリテーターに連絡をとり、回復から放鳥まで委任する必要がある(Fair et al. 2010)。対して日本では、鳥獣の保護及び管理並びに狩猟の適正化に関する法律十九条で捕獲許可の有効期限の末日から起算して三十日を経過するまでの間に飼養する場合は別途登録が必要ないと定められており、比較的長期間バンダーが回復のために飼育する事が許されている。

また、日本においては傷病鳥を受け入れ可能な施設は限られており、伝染病等の発生時は受け入れが難しいと思われ、バンダーによる保護が望ましい場合もあると考えられる。飼育による回復を考える場合、標識マニュアルには飼育の仕方についての記述はなく、多くのバンダーが飼育とリハビリテーションの方法を独自に習得する必要がある。本発表では、演者の行った一時飼育と野外への復帰の最近の実例を数例紹介しながら、その方法や注意点を報告する。

引用文献：

Busse P & Meissner W (2015) Bird Ringing Station Manual. De Gruyter, Berlin.

Fair J, Paul E & Jones J (eds) (2010) The Ornithological Council Guidelines to the use of wild birds in research. Third Edition. Ornithological Council, Washington, D.C.

Lowe KW (1989) The Australian Bird Bander's Manual. Australian National Parks and Wildlife Service, Canberra.

North American Banding Council (2001) The North American Banders' Study Guide. North American Banding Council, Point Reyes Station.

山階鳥類研究所保全研究室 (2009) 鳥類標識マニュアル (改訂第 11 版). 山階鳥類研究所, 我孫子.

一般講演

1. 繁殖鳥モニタリング調査で見えたもの（札幌・羊ヶ丘の9年間）（川路 則友）
2. カワセミの嘴（内田 博）
3. コルリの羽装と年齢に関する検討（木下 徹）
4. 京都府の鳥類標識情報の俯瞰作業とその展開（須川 恒・辻本大地）
5. 浦安市千鳥にて繁殖したコアジサシ（佐藤達夫）
6. 日本産鳥類の識別ガイド作成構想について（深井宣男・ML id-guide）
7. 新潟県加茂川におけるアオシギの標識事例と採食習性（千葉 晃）
8. ハクセキレイのadventitious replacementと性、年齢階級、体調の関係の実験的検証（高木昌興）
9. ユリカモメ・カラーマーキング事情（澤 祐介）

繁殖鳥モニタリング調査で見たもの（札幌・羊ヶ丘の9年間）

川路則友（札幌市）

北海道札幌市南東部に位置する調査地（通称 札幌・羊ヶ丘）では、1989年に開始以来、春秋の渡り期を主体にバンディングを長期間継続実施しているが、2013年からは繁殖鳥モニタリング（MAPSJ）調査も開始した。同調査の毎年の調査回数は、第4期（5月31日～6月9日）から第11期（8月9日～18日）の期間中、約10日間隔で1回ずつの8回で、時間は4:00amもしくは日の出から6時間、網はHTX（30メッシュ）を10枚使用した。これまでの9年間で、30種1,088羽を新放鳥もしくはRT放鳥した。毎年の新放鳥総数の中での幼鳥の割合は、年による大きな変化は認められなかった。毎年必ず捕獲されるのは、ヤブサメ、アオジ、センダイムシクイ、キビタキ、クロツグミ、クロジおよびシジュウカラの7種であった。また、調査期間中に捕獲されたものの、調査地での繁殖は確認されず、一時通過と思われるものが、エゾムシクイ、オオムシクイ、シマセンニュウなど6種であった。捕獲数のもっとも多いヤブサメでは、2013～2016年に毎年30羽前後で推移していたが、その後徐々に減少してきた。一方、生産性指標（幼鳥数/成鳥数）は、0.30～0.53（2016年以前）、0.25～0.58（2017年以降）であり、平均値では有意差はなかった。調査地周辺におけるヤブサメの秋季捕獲指数（（9月以降のヤブサメ新放鳥総数）/（9月1日以降のヤブサメ初捕獲日から最後の捕獲日までの日数）/（総網数））を算出すると、2017年から急激な減少傾向が認められた。調査期間中、調査地の植生環境にはとくに変化が認められず、繁殖成績も変わらないと思われることから、これはヤブサメ個体群全体に見られる傾向と推測され、越冬地もしくは中継地での生息環境変化が疑われる。アオジでは、本調査地での繁殖期における捕獲動向には著しい変化は認められなかったが、秋季捕獲指数で2017年以降、顕著な減少傾向が認められた。これは本調査地での繁殖状況には変化は見られないものの、より北方で繁殖し、本調査地を通過する個体群が近年減少していることが疑われた。長期間、同一場所、同一手法で継続する繁殖鳥モニタリング（MAPSJ）調査の重要性が本調査地におけるわずか9年間の結果でもじゅうぶん示されたことになる。

カワセミの嘴

内田 博（埼玉県）

2020 年 11 月から 2021 年 11 月までの 1 年間、埼玉県中央部の荒川水系の、都幾川（7km 区間）、市野川（10km 区間）、滑川（2km 区間）と付近の溜池などで、カワセミの捕獲を行い、身体各部の測定と全ての個体の写真撮影を行い、形態の変化を調べた。その中で今回は嘴についての測定結果について述べる。

まず、カワセミの性は下嘴の色で判別（雄は黒い・雌は赤い）との文献の基準を元に、色彩と長さについて整理してみた。

カワセミの嘴は年齢、季節によって長さや色彩が変化していた。成鳥の嘴の長さは一年を通して長さに変化があり、秋から春にかけて平均値では一番長くなり、繁殖期には短くなった。また長さの平均値では雄のほうが 1.7mm 長く、性差があったが、重複部が多く性判別には使えない。幼鳥では巣立ち直後は、嘴は黒く、短く、巣立ち後 2～3 ヶ月 は一日 0.1mm 以上も伸長し、その後の伸長は緩やかになった。また下嘴の色は、巣立ち後 2 ヶ月もすると、雌では下嘴が鈍いオレンジ色に変化した。雄でも下嘴の基部から中央部にかけて、鈍いオレンジ色に変化する個体も多くいた。雄の下嘴の色は季節によって、黒かったものが、一部薄赤くなったりしていた。ただ季節でどの方向へ変化するかは個体によって違ったが、例数は少ないので、どのような傾向があるのか判らなかった。

コルリの羽装と年齢に関する検討

木下 徹（日本鳥類標識協会にいがたグループ）

はじめに

水田が広がる新潟平野のほぼ中央に約 1.4ha の屋敷林を備えた越後の豪農の館「笹川邸」がある。自宅から近い当家の屋敷林や庭では、春の渡りの頃様々な野鳥のさえずりが聞かれる。このような環境を「水田地帯に形成された小規模の樹林オアシス」と捉え、許可を得て 2002 年から鳥類標識調査を継続してきた。林の規模も小さく小鳥類の主要移動ルートから逸れているため標識総数こそ少ないが、コルリやルリビタキ等樹林性の鳥類が定期的に飛来することもわかった。今回は網場紹介を兼ね、羽装や外観に基づいてコルリの雌雄と推定年齢について検討した結果を報告する。

調査方法

調査時期は初夏の短期間（例年連休の前後から約 1 ヶ月間）で、休日を利用して行った。調査時間は朝 5 時頃から施設が一般公開される 9 時までの約 4 時間程度である。邸内には高さ約 20m に達するアカマツやスギなどの高木をはじめ、モミジ類などの中低木が植栽され、ツバキ類やその他の植物が藪状に茂った場所がある。これらの間を縫うよう水場や藪のそばにかすみ網（ATX）を合計 5 枚設置した。その位置は調査期間中殆ど変えず、また、音声誘引も行わなかった。

結果

（1）捕獲数と捕獲時期

当地における 20 年間（2002 年～2021 年）の放鳥総数は 45 種 1,378 羽で、再捕個体の中で Rt はスズメ 1 羽とシジュウカラ 2 羽、Rc はヒヨドリ 1 羽に過ぎなかった。これは前述のとおり、当所が渡りのルートから外れているためとも考えられる。注目したコルリは総数 60 羽で、年によるばらつき（0 羽～10 羽）があり、性比は雄に大きく偏っていた（60 羽中雄は 47 羽、雌は 13 羽）。雌とした中にも雄の若齢個体が含まれる可能性は完全に否定できなかった。本種は毎年 5 月に入ってから飛来し、中旬の 15 日頃まで捕獲できたが、それ以降も春の通過があるか否かは不明である。

（2）外観による雌雄判別

コルリの雌雄は、主に光沢に乏しい青色羽毛の出方（存在部位とその範囲等）で判別できるが、雌の推定 2 歳以降と雄の推定 1 歳との識別は、特に注意が必要である。この場合、若齢雄は上尾筒の暗青色が雌の成鳥より濃く、雨覆は不鮮明ながら薄い青色を伴っていた。また、喉の淡褐色部も雌より濃く、しばしば鱗状斑を形成していた。

（3）年齢の推定

生誕年のわかる個体やその後の再捕例がないため、年齢の査定はできなかった。また、春の移動期においては頭骨の含気化程度も年齢判定には利用できなかった。しかし、青色羽毛の分布や濃淡に注意して体各部（胸、喉、背、脇腹、目先、雨覆、風切、上尾筒、尾）の色調を収録画像で比較検討した結果、雄が鮮やかな青色の成鳥羽になるまで 4 年を要するものと推察された。検討事例数が少ないため、皆様から示唆や批判をいただきつつ今後も検討を続けたいと思っている。

京都府の鳥類標識情報の俯瞰作業とその展開

○須川 恒・辻本大地(京都府鳥類レッドリスト改訂分科会)

京都府は2002年にレッドデータブックを作成し、ほぼ10年毎にその改訂作業をおこなってきた。2019年・2020年に鳥類のレッドリストを改訂する作業にかかわり2021年3月に京都府に結果を報告、その後京都府から公表された。

レッドリスト改訂のためにはさまざまな情報を活用したが、今回は以前から課題としていた京都府の約50年間の約18万レコード(168種の情報)の鳥類標識情報を山階鳥研へ申請して取り寄せて俯瞰して、レッドリスト改訂作業に役立てた(許可番号:山階保全第31-162号)。この詳細については、すでに京都府の鳥類レッドデータブック改訂用の以下のサイトで公表している。

<http://larus.c.ooco.jp/KBIRDREDB.htm> (→3)のその1~6のファイル)

本報告ではこの作業で行った作業の手法を紹介し、今後展開をする上でのヒントについて言及する。

- ・利用者について データは申請利用者以外には渡さないという縛りがある。今回はレッドリスト改訂分科会メンバーの7名で申請した。7名はいずれも鳥類標識調査への何らかのかかわりがある。利用者以外の標識者の情報については共同発表などが推奨されているため、今後、展開をする上では、申請利用者は、その都道府県での調査をしている(または支援している)バンダーを広く含めておくことが、俯瞰情報を共有し活用するという観点から大切と考える。
- ・申請が通ってどっとエクセルファイルで過去のデータが送付された場合、少なくとも俯瞰作業するための加工が必要であった(集計しやすいように全レコードに放鳥年、放鳥月、10年間別集計のため(197~201を記入)、N(=1)、の欄を追加した)。
- ・主な俯瞰作業の内容は以下である。

調査地点図(水系も表示)、主要調査地別総捕獲数等の表、京都府の種・10年間別放鳥数の表、レッドリスト検討種などの種・10年度・月別の表、回収情報とその可視化。

これらの俯瞰作業の多くは初歩的なエクセルの操作(ピボットテーブルなど)でできたが、調査地地図や回収記録の可視化についてはQGISやRが必要だった。今回はそこまではやっていないが、SKYPEなどの無料会議機能をつかって関係者が顔を見せあって俯瞰作業を進めればもっと楽しめたと思う。

・まとめの報告では、京都府の場合は標識情報の種別リストなどの俯瞰後、レッドリスト改訂のための目的で種別のまとめをして報告した。これらは、アルラ(バンダー同人誌)で前史編、構想編を含めて報告を掲載の場とさせていただいた。

・京都府の鳥類レッドデータブック改訂用サイトにアルラ誌の報告のPDFファイルを掲載した。今後の展開としては 鳥類標識調査グループ・××(××は都道府県名)といったサイトを立ち上げて、これらの成果を一般にも普及啓発することが考えられる。

この作業はコロナ禍の2年間でもなんとかできたが、まだ課題は残っている。それはリターン・リポート情報の体系的俯瞰法、市町村別情報の整理、主な標識調査地目録の作成、それとリンクする調査地単位のまとめなどである。

浦安市千鳥にて繁殖したコアジサシ

佐藤達夫（NPO 行徳自然ほごくらぶ）

2021 年 5 月 6 日夜に市川・浦安の造成地をまわったところ、浦安市千鳥の造成地（工事現場）にてコアジサシの声を確認した。5 月 9 日昼に再訪したところ、コアジサシ約 60 羽が降りていた。千葉県に連絡し、5 月 17 日に千葉県・工事関係者・私の 3 者で現場確認し、コアジサシの保全に協力いただけることになった。しかし、工期が決まっているため、工事作業の進行と保全の両立を目指すことになった。工事関係者の了承を得て、週 1 回営巣地への立ち入り調査をし、個体数、営巣数、ヒナ及び成鳥への標識調査を実施した。5 月 20 日 80 羽 83 巣を確認。6 月 3 日、初ヒナを確認。個体数、営巣数共に 6 月 10 日をピーク（274 羽、217 巣）であったが、以降、急激に減少。ヒナ数も増えず、ヒナの再捕獲もほとんど無い状況となり、センサーカメラを設置したところネコの侵入が認められた。ネコによる影響が大きく飛べるようになった幼鳥は、おそらく 5 羽程度と思われる。ネコ対策などが繁殖成功の重要なポイントである。その他、シロチドリ、コチドリ各 2 巣を確認した。成鳥の再捕獲は、東京大田区森ヶ崎放鳥 3 個体、市川市塩浜放鳥 1 個体、市川市原木放鳥 1 個体とすべて東京湾奥部出身であった。また、5 月 20 日に九十九里放鳥のカラーリング個体と 6 月 3 日、黒フラッグを確認した。

日本産鳥類の識別ガイド作成構想について

○深井宣男・ML id-guide（日本鳥類標識協会）

標識調査の成果で最も目を引くのは渡り経路の解明であろう。しかし、近年は小形鳥類にもジオロケーターなどの記録計を付けることができるようになったため、渡り経路の解明に関しては金属足環のみの標識調査は活躍の場がなくなってきたかもしれない。だが、言うまでもなく、標識調査で分かることは個体の移動だけではない。解析次第で標識調査のデータは宝の山となる。そのデータ収集の多くを全国のボランティアバンダーが担っているわけだが、宝の山とするには重要な前提がある。それは識別（種・亜種・性・齢など）の正確性である。

識別の基本は標識調査マニュアルに載っているが、バンダー自身の努力が欠かせない。事情は世界共通だから、標識調査向けの識別ガイドは古くからいろいろ出版されている。Svensson のスズメ目ガイドを始め、Baker の BTO 非スズメ目識別ガイドなどを頼りにするバンダーは多いだろう。Pyle の北米鳥類識別ガイド、Jenni と Winkler のスズメ目換羽ガイドなどもある。ネットで公開されている Aragon's Birds や Ringers' DigiGuide, ONCFS のカモ類ガイドなどを利用することもあるだろう。個人的には、既存のガイドの集大成的な Demongin の欧州鳥類識別ガイドを手にしたとき、これが最終到達点かもしれないと感じた。掲載種数（特に日本との共通種）の問題や亜種・個体群の違いがあるにせよ、網場ではこの 1 冊で事足りるとさえ思えた。一方、識別ガイドとして利用できる和書は、山階図鑑、鳥研標識研究室のカラーマニュアル、茂田の形態と識別などのほか、標識調査用ではないが、氏原らのカモ本や箕輪の海鳥ハンドブックがある。これらの資料で日本産鳥類のかなりの範囲を網羅できているが、標識普通種でありながら抜けている種や情報の更新が必要なものも少なくない（現状は、須川リストによくまとめられている）。

鳥研のカラーマニュアルが出なくなったところから、標識協会でも識別ガイドの必要性とその対応が検討されてきた。委員会が作られたこともあるが、残念ながら現在は解散している。演者にとって、転機は 2020 年に訪れた。新刊案内を見て衝撃を受け、即予約した Norevik らの東亜スズメ目識別ガイド（通称ヤマヒバリ本？）を手にして単純に思ったのだ、「これの日本版を作りたい」。そこで同年 10 月、標識協会の ML jbba-ml で識別ガイド作成構想を勝手に宣言し、同 11 月に標識協会 HP 委員会の支援を得て ML id-guide が独立した（参加者 122 名：2021.12.12 現在）。最初の 4 か月は順調で、活動の方向性の議論、カワセミの性と齢、性判別と恥骨間距離、キセキレイについての投稿が 116 件と ML は盛り上がった。しかし 3 月に入ると休止状態になってしまった。6 月にはクロツグミの話題で再開し、投稿が 75 件と再び盛り返したが、8 月以降、再度の開店休業状態に陥った。原因は明白で、ML 上での論議を踏まえて深井が作成するはずのガイドのたたき台が一向に作成されず、作業が先に進まなかったからである（反省頻り）。

今回の発表では初心に戻り、まず日本産鳥類識別ガイド構想の再提示と、この 1 年間で盛り上がった内容を紹介し、バンダー諸氏の参加と支援をお願いしたい。また、活動停滞の原因について反省するとともに、作業を進める上での方法論の改善と、今後の展望などについて議論したい。関連して、測定値収集と撮影画像のアーカイブ化についても提案したいと考えている。

新潟県加茂川におけるアオシギの標識事例と採食習性

千葉 晃（日本標識協会新潟グループ）

【はじめに】 アオシギ *Gallinago solitaria* はシベリアの東部・中部、サハリン、ヒマラヤの北部等で繁殖し、冬季はインド、パキスタン、中国南部などに渡り越冬することが知られている。しかし、日本を含めその生態に関する情報は極めて少ないように思われる。私は近年新潟県下越地方の加茂川で標識調査に基づくカワガラスの繁殖生態を調査中であるが、偶然アオシギと遭遇し、野外観察や捕獲・標識を行う機会を得た。その際に得た情報はごく少ないがここに紹介し、皆様から教示を得て本種の生態解明に貢献したいと思っている。

【調査地と方法】 調査地の加茂川（信濃川の支流）は新潟県下越地方に位置する栗ヶ岳（標高 1,239m）の山麓を流下する中規模河川で、本種はその上流域（標高約 80m～130m、川幅 6m～10m）で確認された。辺り一帯は低山に囲まれた中山間地の様相を持ち、川沿いの平坦地には水田や集落等が存在し、川はしばしば一般道路に近接して流下する。野外観察はカワガラスの生態調査に合わせて行い、本種が発見され、かつ捕獲条件が整った機会を逃さずにカスミ網（DTX 1 枚）を設置し、標識作業を試みた。捕獲作業は日中である。

【結果】 2019 年 1 月中旬から 2021 年 1 月末までの 3 冬季間に合計 4 羽のアオシギを観察し、そのうち 2 羽を捕獲・標識した。確認された 4 羽を便宜上、第 0～第 3 個体と仮称して結果を紹介するが、いずれも単独での出現だった。捕獲された 2 羽は共に性齢不明（UU）で、第 1 個体および第 2 個体の計測値は下記したとおりである（個体番号以後の数値は自然翼長、尾長、フシヨ長、露出嘴峰長、体重で、単位はmm及びg、最後は標識年月日）。

第 1 個体（5B-55510: 154.0, 66.5, 35.6, 77.4, 139.0; 2019.02.24）

第 2 個体（6A-18938: 147.0, 74.5, 34.7, 74.2, 132.0; 2019.12.16）

これらのうち、第 1 個体については放鳥約 1 年後（2020.02.08）に同所で目視回収（足環番号を撮影して確認）することができた。他の 2 個体（第 0 及び第 3 個体：共に未標識の性齢不明個体）についても外部形態を撮影し、これらの特徴を 4 羽間で比較してみたが、性齢判別に有効な形質は発見できなかった。しかし、第 3 列風切の縞模様は個体差が明瞭で、今後他の検索方法も合わせた精査により性齢判別に役立つ可能性が示唆された。

本種は川岸の堆積有機物の多い環境で採食していることが多く、時には渉行や遊泳によって流れを横断し、また時には石伝いに歩行して極めてゆっくりと移動しながら採餌を行った。画像から判別できた本種の餌生物はすべて川底の小動物で、ガガンボ類の幼虫、ヨコエビ類、ユスリカ類の幼虫、ヘビトンボの幼虫であった。

ハクセキレイの adventitious replacement と 性、年齢階級、体調の関係の実験的検証 高木昌興（北大・院理・多様性生物）

adventitious replacement（事故換羽と定義）とは、偶発的に抜けた羽毛が通常の換羽サイクルではない時期に再生する機構を指す。事故換羽に遭遇する機会は非常に限定されるので、機会依存の捕獲調査では関連する要因の探索は難しい。そのため詳細に検討するには実験的な操作をせざるを得ない。この研究では事故換羽に影響を与える要因を調べるため、事故換羽を模しハクセキレイ *Motacilla alba lugens* の尾羽（T4）一枚を抜き取る実験を行なった。その後、再生した T4 の長さと元の長さの比率が、性（オス・メス）、年齢階級（第一回冬羽＝若鳥・成鳥冬羽＝成鳥）、体調（体重/フシヨ長³）と関係しているか検討した。2002 年 1 月下旬に大阪市と堺市の境界にある大和川大橋の畔において 288 個体のハクセキレイを捕獲標識した。自然翼長・フシヨ長・体重を計測し、右の T4 を抜き取り、長さを計測した。2 月後半から 3 月上旬にかけて 121 羽を再捕獲、体重を計測し、再度 T4 を抜き取り計測した。再生が終わった T4 の元の T4 に対する比率の分析では（GLM with the ‘offset’ method）、オスはメスよりも元に近い長さまで伸長させていた。体調の良い個体も元の T4 に近い長さまで T4 を伸長させる傾向があったが、年齢階級では説明できなかった。求愛行動の特性からオスはメスよりも長い尾羽を必要とすると推定される。そのため成鳥と若鳥共に十分に長い尾羽を揃えていることが機能的に重要であると考えられた。元の T4 に対する再生途中の T4 の比率は、成鳥は若鳥よりも大きかった。成鳥は若鳥よりも失った尾羽の再生速度が遅いか、もしくは時期が遅い再生開始に由来すると推察される。性と体調は影響していなかった。再捕したオス成鳥はすべて T4 の再生を開始していたが、メス若鳥の 13% は再生を開始していなかった。T4 を再生させていないハクセキレイの体調は、再生が終わった T4 を持つ個体や伸長中の T4 を持つ個体間で違いがなかった。若鳥における T4 の再生は、生理学的な制約よりもむしろ進化的な制約によるものかもしれない。つまり事故換羽については、性選択や生活史戦略の文脈で理解する必要があるだろう。

ユリカモメ・カラーマーキング事情

澤 祐介（山階鳥類研究所）

ユリカモメはユーラシア大陸北部で広く繁殖し、アジア圏では東アジアから東南アジアにかけて越冬する。日本では冬鳥として本州から南西諸島まで飛来する。ユリカモメの標識調査は、関西（兵庫県、大阪府、京都府）及び関東（東京都、千葉県）において、カラーマーキングを用いた調査が実施されてきており、カラーリングを装着した個体の観察情報の蓄積も進んできている。発表者は、東京都隅田川で 2010 年より、福岡県で 2017 年よりカラーリングによる標識調査を実施しており、2021 年 4 月までにそれぞれ 362 羽、72 羽を標識した。隅田川個体、福岡個体間で計測値を比較したところ、関東と九州では一部の計測値に有意差があることが明らかとなった（2017 年標識大会発表）。

また、隅田川で標識された個体は、関東地方を中心にカムチャツカ半島太平洋岸、北海道、宮城県、西は三重県、愛知県、大阪府、兵庫県から観察されている。隅田川標識個体は、北日本から太平洋側を通り、関東地方で越冬、もしくは関西、伊勢湾まで移動していることが推察される。一方で、福岡で標識された個体は、福岡県内と韓国で確認されており、朝鮮半島経由での渡りルートが推定される。観察記録、計測値の双方の結果より、九州で越冬しているユリカモメは、関東の個体とは、別個体群である可能性が示唆される。

網場紹介発表

	発表者	網場名	調査の概要
1	古園由香	大阪府枚方市穂谷	大阪府の東端の低山で毎月調査を実施しています。メジロやルリビタキ、ウグイスなど捕れます。
2	中村 進	大阪府和泉葛城山頂	ブナ林に隣接する2次林、キビタキやオオルリ、クロツグミ、オオアカゲラ、カケスなどの森林性の鳥、冬季は凍結などで調査不可能ですので、4月～12月に年間10～20日調査を行っている。
3	田川之彦	奈良県大台ヶ原	環境は亜高山帯の森林。キツツキ、カラ類が中心。調査時期は開山期間中の4/21～11/30。
4	峯尾雄太	山梨県南都留郡山中湖村 旭ヶ丘	富士山裾野の山中湖村にて、雑木林内の沢に水浴びに来る山の鳥全般。優占種で夏鳥はキビタキ、クロツグミ、センダイムシクイ、オオルリ、イカル等です。4月～8月の繁殖期調査が基本でここ数年はほぼ通年調査中。
5	日比野政彦	島根県益田川河口	島根県西部益田市の河口に近い益田川右岸と山陰本線の間、かつて水田であったアシ原 夏季：オオヨシキリ、ツバメのねぐら、夏秋渡り時期：シマセンニュウ、コヨシキリ、冬季：カシラダカ、オオジュリン等

6	田中 智	滋賀県西の湖	西の湖のヨシ原が調査地です。昨年春から、春夏は月 1 回、秋冬は月 3 回を目標に調査をしています。主な対象種はコヨシキリ、ノゴマ、オオジュリンです。今回は、岐阜県でのケリの標識調査についても少し紹介します。
7	吉田一朗	福井県中池見湿地	湿地、林等 ノジコ、アオジ、オオジュリン、コヨシキリ、シマセンニュウ、オオヨシキリ、ノビタキ、ノゴマ、ウグイス、モズ 周年（特に渡りの季節）
8	望月通人	茨城県神栖市高浜	利根川下流域の河川敷で、オオセッカやコジュリン、コヨシキリなど湿原～ヨシ原に生息する鳥類が捕獲されます。月 1 回を目安に通年で調査を実施し、繁殖期には昨年から MAPS を開始しました。
9	細谷 淳	宮城県名取川	オギ原、ホオジロ類、ヨシキリ類、センニュウ類、9～11 月。バンディング技術の向上と研究・教育が網場の主な目的です。そのため実技講習生も積極的に受け入れています。潜行性の強い種の確認も目的の一つです。
10	小田谷嘉弥	茨城県常総市菅生沼	ヨシ原と河川敷の農地で、1983 年からオオヨシキリ、オオジュリンなどの小鳥を主な対象に調査が続けられています。2012 年からはヤマシギなどを対象にした調査も開始しました。周年・月 1 回の定期調査を行っています。

11	浜地 歩	沖縄県宮古島	沖縄県宮古島の林内や湿原で標識調査を実施しています。年 100 羽程度の放鳥数ですが四季 1 回の調査を目標にしています。また、今年からは小規模ですがツバメチドリなどシギ、チドリ類のフラッグ調査もはじめました。
12	小西広視	沖縄県島尻郡粟国村粟国島	沖縄本島の西の小さなハブがいなかったはずの離島の疎林で春と秋の渡りの時期にしています。春は種数多め、秋はムシクイ類など捕獲と毎回新しい発見と出会いがある調査地です
13	須川 恒	兵庫県伊丹市昆陽池公園・京都府宇治川河川敷・舞鶴市冠島	3 ヶ所の調査地の調査内容を紹介するウェブサイトを 3 つ紹介します。昆陽池公園→カワウ・ユリカモメなどカラーマーキングサイト。宇治川→ツバメ類のねぐら調査サイト。冠島→オオミズナギドリの調査紹介サイト。
14	牛根奈々	愛知県、竹島海岸	海岸、ユリカモメ、トビ、ドバト、研究のため冬季のみ、3 年間捕獲を行いました。観光地のため、捕獲よりも一般の方の理解を得ることを優先して取り組んでいました。餌付けされたトビとドバトとの戦いは壮絶でした！
15	仲村 昇	浜頓別ステーション（北海道枝幸郡浜頓別町）	9 月中旬から 10 月中旬に、サイクリングロード沿いの森林の網場で、アオジ、ウグイスなどの森林性・草原性の小鳥類を対象にして調査が行われている。

16	仲村 昇	風蓮湖ステーション（北海道根室市）	9月下旬から10月中旬に、原野内の網場でアオジ、ベニマシコなどの草原性・森林性の小鳥類を対象に調査が行われている。
17	森本 元	福島潟ステーション（新潟県新潟市）	春期（4～6月）にオオヨシキリなどの草原性の繁殖鳥、秋期（10月～11月）にオオジュリン、カワラヒワなどの草原性の小鳥類を対象とした調査がヨシ原の網場で行われている。
18	澤 祐介	織田山ステーション（福井県丹生群越前町）	春期（4～5月）と秋期（10～11月）に日本海側の山地でツグミ類、アオジ、メジロなどの森林性の小鳥類を対象とした調査が行われている。

大会参加者

	No.	氏名	一般講演	シンポ講演	網場紹介
あ	1	阿子島大輔			
	2	足利直哉			
	3	安部亮佑			
	4	天野孝保			
	5	五百澤日丸			
	6	市川洋子			
	7	井戸浩之			
	8	今井菜摘			
	9	今村知子			
	10	上田恵介			
	11	上野吉雄			
	12	牛根奈々		○	○
	13	内田 博	○		
	14	江指万里			
	15	及川樹也			
	16	大内若葉			
	17	大倉史雄			
	18	大島遥香			
	19	岡村裕透			
	20	尾崎清明			
か	21	小田谷嘉弥			○
	22	梶田 学			
	23	片岡宣彦			
	24	亀谷辰朗			
	25	狩野清貴			
	26	川合正晃			
	27	川路則友	○		
	28	河原孝行			
	29	菊池 博			
	30	北川捷康			
	31	木下 徹	○		

	32	金 京純			
	33	熊代直生			
	34	倉橋義弘			
	35	黒田治男			
	36	古園由香			○
	37	小西広視			○
	38	小林和楽			
	39	小林さやか			
	40	小林めぐみ			
	41	小宮山誠			
	42	小室智幸			
	43	米田重玄			
	44	小山正人			
	45	小山和美			
さ	46	齋藤武馬			
	47	齊藤安行			
	48	作山宗樹			
	49	佐藤達夫	○	○	
	50	佐藤理夫			
	51	佐藤文男			
	52	澤 祐介	○		○
	53	茂田良光			
	54	清水敏弘			
	55	須川 恒	○		○
	56	鈴木明子			
	57	鈴木 仁			
	58	千田万里子			
た	59	高岡奏多			
	60	高木昌興	○		
	61	高橋佑亮			
	62	高柳和江			
	63	田川之彦			○
	64	竹田山原楽			
	65	竹丸勝朗			
	66	田谷昌仁			

	67	田中 忠			
	68	田中 智			○
	69	千葉 晃	○		
	70	手井修三			
	71	寺島正彦			
	72	富川 徹			
	73	鳥飼久裕			
な	74	中田達哉			
	75	中野晃生			
	76	仲村 昇			○
	77	中村 進			○
	78	西 教生			
	79	野村 亮			
は	80	博多屋汐美			
	81	橋本啓史			
	82	浜地 歩			
	83	葉山政治			
	84	日比野政彦			○
	85	平岡 考			
	86	深井宣男	○		
	87	深谷 治			
	88	星野由美子			
	89	細谷 淳		○	○
	90	堀田昌伸			
ま	91	増田安司			
	92	松本祥子			
	93	水田 拓			
	94	峯尾雄太			○
	95	箕輪義隆			
	96	村尾裕美			
	97	村上 亮			
	98	村濱史郎			
	99	望月通人			○
	100	森 香織			
	101	森本 元		○	○

	102	森本ユキ子			
や	103	柳田和美			
	104	山口典之			
	105	山根みどり			
	106	山本敏夫			
	107	油田照秋			
	108	吉田一朗			○
	109	吉田邦雄			
	110	吉田良平			
	111	吉丸博志			
	112	米山富和			
わ	113	渡邊真央			

2021年度（第35回）日本鳥類標識協会全国大会

大会実行委員：

牛根奈々，小田谷嘉弥，古園由香，澤 祐介，細谷 淳（五十音順）



表紙および本項のイラスト：牛根奈々

2021 年度（第 35 回）日本鳥類標識協会全国大会 講演要旨集

編集・発行：2021 年度（第 35 回）日本鳥類標識協会全国大会実行委員会

千葉県我孫子市高野山 115 保全研究室気付

発行日：2021 年 12 月 25 日
